

目的

和服着装の立場から，平面構成による和服は人体に纏いつけるところに多くの要因が含まれていると考えられる。

そこで，基本的な着装の要因を明確にし，従来のように体験的な着装にとらわれず，未経験者でも容易に着ることを可能ならしめることが本研究の最終目的である。

今回はまず，基礎的研究として着装上の襷先の高さを要因にとり，歩行動作による裾線の変化を計量化し，歩行のしやすさと裾の着くずれの問題を追求する。

方法

女子学生の中から普通体型の者を着装実験のモデルとして選び，毛100%の着尺地で標準寸法による実験着を構成した。着装の条件は背縫い線を人体の正中線に定め，背縫い線位で裾の床上がり高さを一定とした。動作は静止時の自然立位を基準として，爪先点から前方爪先点までの35°を一步とし，襷先の高さの増加に伴う裾線の形状変化を床面上への投影図としてとらえ，動作時の裾線の形状変化および，高さの変化を測定した。

結果

静止時においては，襷先の高さが増加するに伴い，裾線の周囲長と投影面積は減少する。歩行時では，襷先の高さの増加に従って裾線位の高さは増大する。これらの測定結果から，歩行の機能性と裾の着くずれを数量的に表現する可能性を見出した。